法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

尾形憲塾22年から

OGATA, Ken / 尾形, 憲

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
78
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
39
(発行年 / Year)
2010-06-15
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007009

【研究ノート】

尾形憲塾22年から

尾　形　　憲

昨年の10月17日，仙台の宮城学院女子大学の大学祭に招かれて，「尾形憲塾」の講演に行ってきた。「尾形憲塾」については，22年という長い間続けて下さった同大学の黒滝正昭教授にそれを始めた契機から今日に至る経緯について書いて頂いてあるが，黒滝さんは今年度が定年で，この「塾」もこれが最後である。そのための記念として，10年前ピースボート同乗以来この「塾」を含め私の平和運動にいろいろご協力頂いたソプラノ歌手森田留美さんの発案で，後で見るように，学園の庭にヒロシマで被爆したアオギリ２世を植樹することになっていた。それで当日，「尾形憲塾」第１回のとき私と一緒に話して頂いた平木礼子さんの「お母さんは中学生（本稿第２節）」のコピーを受講者に配って頂いて，私の講演，森田さんの歌とトーク，絵本「アオギリの願い」の朗読，質疑，そして植樹と，学内でのイベントをひとわたり終わった後のノミナールで，私は提案した。せっかく22年も続け，記念の植樹までできたのだから，これを何かの形で記録として残せないかということで，これに皆さんの大賛成を得た。

帰京後，早速私は法政大学経済学部資料室へ連絡し，同学部学会の機関誌である本誌に執筆の承諾を得てもらった。

前回，私は本誌第66巻第３・４号（2001年３月）に「ピースボート2000南回り地球一周の旅から」と題して書いている。読み直してみると本論の

前にかなり長ったらしい近況報告を付け加えていた。あれからもう9年，退職してから16年だから，教授会のスタッフもすっかり変わって，知らない人がほとんどだろう。前稿もお読みになっていない方がほとんどと思われる。そうなると,「近況」も，少なくともここしばらくどんなことをやっていたか書かねばなるまい。翌年のピースボートから始まってドン・キホーテみたいな度重なる国家相手の訴訟などなど。とくに,昔は「西の立命・東の法政」「赤の牙城」とか,「マル経のメッカ」とか言われたりしたのもすっかり様変わりしているだろう。それなら私のケインズ理解についても近経の方々からご教示頂けるだろう。

あれこれ考えると，かなり膨大なものになるが，折角の機会だから書かせてもらおう。こう決めて,結局第1稿「『尾形憲塾』22年から」で宮城学院でのこと，順序が逆になるが，第2稿「はちどりの一しずく」で私の近況のことということになった。

また前稿で私は「大学退職のとき決意した仕事の一つである“学歴社会撲滅”からはほとんど足が遠のいてしまったが，平和運動の方はさまざまな形でかかわっている」と書いた。だが，この「尾形憲塾」もそうだが，私が本当の学びとは何かを言い続け，書き続けてきたことは，まさしく学歴社会撲滅のためのささやかな仕事にほかならない。そして平和というのが単に戦争がないというだけでなく，その原因となっているさまざまの差別・抑圧，飢餓・貧困，環境破壊などがないことも含む“積極的平和”であるなら，本学の学びの追及もまさしく広義の平和運動の一端であることに気がついた。

「尾形憲塾」については，22年もの長い間（始まったとき，今回の受講生はおおかたまだ生まれていなかったわけだ),後で見るように実行委員の学生がいないときは，お1人ででも何から何まで苦労しながら続けてくださった黒滝さんをはじめ，おいで下さった講師の方々，実行委員の学生さんたち，手薄のときなどお手伝いくださった黒滝道子さんなど，皆さんに心からお礼申し上げたい。

また黒滝さんは毎年「塾」終了後当日の写真やＤＶＤ，受講後の学生の感想を，後者については学生に返すときのために100数十枚のものをいちいち誤字・脱字は訂正されたものをコピーして，お送りくださった。その懇切丁寧さには頭が下がる。なお講師のなかで白井家光さんはすでに鬼籍に入られた。謹んでご冥福をお祈りする次第である。

1. 大学祭「尾形　憲塾」22年　～学びへの旅立ち，学びとの出会い～

黒滝　正昭

1988年度一般教養科目「社会科学基礎演習」（学科横断１年次前期・選択必修）で私の担当するグループで，尾形憲編著「学びへの旅立ち～マスプロ授業を越えて～」（時事通信社1981年２月）を教科書に使って演習を行いました。その中に登場する57歳の夜間中学生白井家光さん（「屋根のない教室」，これは55歳で夜間中学に入り，文字を獲得して書いた自分史『学校が翼をくれた』一光社1983年10月の第Ⅱ章の表題）や，「お母さんは中学生」の38歳の平木礼子さん（『暮しの手帖』62号，1979年10月１日，記事）が，「あいうえお」または小学1年の漢字から始めて，生きるために必死に真剣に字を覚え学ぶ姿などに，学生たちは強烈な感銘を受けました。

当時まだ法政大学の現役教授であった尾形氏は，こういった，大学とは無縁の世界で一生懸命生きている方々を「一日外来講師」として，ご自分の担当する「教育経済論」の講義に招き，1000人位も受講している大教室で学生たちに，なぜこの年になって「あいうえお」あるいは小学１年の漢字から勉強しているのか，これまでの人生を話していただいた。大学の教授たちの講義はサボリ放題の学生たちが，そのお話には真剣に聴き入って感想文を書く。それを編集して，外来講師のお話と共に上記編著で紹介されていました。

もう一つ尾形教授は「モグリ奨励」を掲げていました。学生証を持った

「ホンモノの学生」は，実は「大学卒」という肩書＝企業への「パスポート」入手が目的で，それに差し支えない限りはサボリまくる。これに対して大学に入りたくても入れない主婦その他の人たちは,「ニセ学生」として講義やゼミにモグってくる。彼女たちは一日も休まず通い続け，率先して調査やレポートに取り組む。だれよりも熱心に学んでも，資格も単位も何もない。これは学ぶこと自体が目的でなかったらできることではない。これが「ホンモノの学生」の姿であって, 学生証を持った「ホンモノの学生」は実は「ニセ学生」だというのです。

こうした教科書で演習を続けていくうちに学生たちの中から，法政大学の尾形教授の「教育経済論」の講義にモグリたいという声が出てきました。しかし，毎週東京までモグリに行くのは無理なので，それなら大学祭を利用して年に1回, 尾形教授と「一日外来講師」に本学にきていただいたらどうか, というアイデアが出されました。「ホンモノの学びと出会いたい！」, それなら「尾形憲塾」という企画名称はどうか！というふうにとんとん拍子に話が進んで,「社会科学基礎演習」黒滝グループ有志ということで，学生実行委員４名が第１回「尾形憲塾」を企画，講師は尾形教授と「お母さんは中学生」平木礼子さんに決まり，講演とシンポジウム終了後，学外で両講師を交えた「ノミナール」も楽しくやりました。

それから22年，学生実行委員のなり手がゼロの年も２回ありましたが，その時は私が一人で教員実行委員として取り組み，休むことなく続けてきました。

「尾形憲塾」は，私が後期に担当した一般教育科目「社会科学基礎講義」（各学科１年次必修）の受講学生に, 授業並みの出席を義務付けました。これは年度によって担当学科が替わるので，英文学科１年，あるいは日本文学科１年，あるいは家政学科・音楽科１年合同クラス等，様々でした。これに短大教養科1年選択科目「社会思想史」の受講学生を加えたこともありました。数年前に短大を廃止して大学のみ10学科となって，学科名称・学生定員も変わって以降は,「社会科学基礎講義」は英文学科･音楽科１年合

同クラスか食品栄養学科・生活文化学科１年合同クラスか，交互になり，この２～３年は専ら食品栄養学科・生活文化学科（後者はさらに最近「生活文化デザイン学科」と名称変更）１年合同クラスに固定して，最終期を迎えたわけです。

森田留美さんの初回2006年（第19期）は，偶々英文学科・音楽科１年合同クラスにぶつかり，その上前期の「基礎演習」（これも当初は「人文科学基礎演習」と「社会科学基礎演習」の両方がそれぞれ選択必修科目であったものが，人文・社会の付かないただの「基礎演習」に名称変更・統合されて，１科目のみの選択必修に変わる等，めまぐるしいカリキュラムの変更が進められました）の私のグループに，例年ゼロであった音楽科の学生が数名参加して，しかも「尾形塾」の実行委員まで引き受けてくれたという，この上ない恵まれた条件が揃った年でした。２回目2009年〈第22（最終）期〉は，社会科学基礎講義は食品栄養科学科・生活文化デザイン学科１年合同クラスで，音楽科はゼロ，前期の私の「基礎演習」に再履修で受講した音楽科の学生が一人辛うじていた，という状況でした。それでもその学生のお蔭で伴奏者を探すことが出来たわけです。

第１期以来，毎回の参加人数は，最初の数回は200人近い出席者がいましたが，終りの数回は100人をいくらか越える程度が普通でした。同じように私の「社会科学基礎講義に組み込んで強制しても，学生たちの気質や関心の変化によって減少したようです。それに加えて後半に目だって来たのは，最初の講師尾形教授の講演が終わった途端に半分は退場するようになり，二人目の講師のときは数十名しか出席者がいなくなるということでした。講（公）演がすべて終わって対話の時間になるとさらに減少して，数名というときもありました。大学祭の期間のうちわずか土曜日４時間を「尾形憲塾」のために当てるということは，今の学生たちにとっては「難行苦行」のようです。大学祭の期間を旅行や帰省に当てず，学校に出てくるということ自体が億劫でたまらないようです。だから強制無しには出て来れるものではありません。それでも出席した学生たちに貴重な強烈なインパクト

を与えていることは，毎回の感想文から分かります。

毎回，尾形教授（1994年，第７期からは名誉教授になりましたが）のほかに，法政大学で「一日外来講師」になった方々をもう１人，あとにはご一緒に平和運動にかかわられた方々を，ゲストにお招きしました。次に見るように,「30歳過ぎ車椅子の夜間中学生」相馬靖雄さん（著書『車いすから愛の歌を』あゆみ出版1979年）には３回と最多，平木礼子さんと森田留美さんには２回，あとの方々は1回ずつで，ピースボート創設者　辻元清美さん，夜間中学教諭　見城慶和さん，自由の森学園前学園長　松井幹夫さん,「原爆の図丸木美術館」館長　針生一郎さん，軍事ジャーナリスト　前田哲男さん等々，実に多彩なゲストに来ていただき，味わいの深い講演・公演を開催してきました。白井家光さんは，お招きした数年後に残念ながら亡くなられました。これが「尾形憲塾」です。

第１期　1988年　平木礼子さん
第２期　1989年　相馬靖雄さん
第３期　1990年　57歳の夜間中学生　白井家光さん
第４期　1991年　平木礼子さん
第５期　1992年　相馬靖雄さん
第６期　1993年　辻元清美さん
第７期　1994年　絵や工作などアートで人間教育の関口玲子さん
第８期　1995年　相馬靖雄さん
第９期　1996年　ピースボート事務局長　古山葉子さん
第10期　1997年　「あじさい共同作業所」施設長　天野貴彦さん
第11期　1998年　見城慶和さん
第12期　1999年　松井幹夫さん
第13期　2000年　（尾形教授によるピースボートのスライド上映）
第14期　2001年　「ベンポスタ子ども共和国」駐日大使　星野弥生さん
第15期　2002年　山形県雇用対策室・JVC会員　佐藤稔さん

第16期　2003年　（尾形教授によるアフガニスタンのスライド上映）
第17期　2004年　「在イラク自衛隊監視センター」スタッフ　渡辺修孝さん
第18期　2005年　針生一郎さん
第19期　2006年　森田留美さん
第20期　2007年　前田哲男さん
第21期　2008年　ピースボート　スタッフ　野平晋作さん
第22期　2009年　森田留美さん

２.「お母さんは中学生」（「暮しの手帖」1979年９・10月　№62より）

平木礼子さんは，幼稚園の名札を前にして，スーパーのちらしの裏に「平木育美」と，長女の名前を書き続けていた。八年前のことである。もう何回書いたろう。紙の白いところはあといくらもない。

顔がこわばっていた。その部屋に誰かいたら，礼子さんの書き方が尋常でないことに気がついたろう。書くというより，形をみて，たんねんになぞっているのだった。そのたびに書く順序がちがった。平木礼子さんは字が書けなかった。中学校どころか，小学校もろくろくいけなかったからである。

手紙を書いたこともない。選挙に行ったこともない。職をさがしにいっても，履歴書を出して下さいといわれただけでやめて帰ってきた。履歴書のいらないところをえらんで働いた。どうしても出さなければならないときは，束で買って来て，書き方をこっそりひとにきいては書いた。まちがいなく書けるまでは四枚や五枚ではたりなかった。

学歴の欄には「中学卒」と書いた。その字はきっと，ふるえてゆがんでいた筈だ。字を書くということをいつもさけて生きてきた。

でも，この名札だけはごまかしたくなかった。明日の入園式に，娘が胸

につけていく名札である。書いて，また書いて，どうやら字らしくなってきた。はじめて名札をとりあげて，「平木育美」と書きいれた。

東京と千葉をむすぶ国鉄総武線の電車が荒川をわたる手前に，平井という駅がある。南口の商店街の中ほどを右に折れて六，七分も歩くと，左手に江戸川区立小松川第二中学校がある。夕方の五時半，昼間のざわめきがひとしきりしずまった校舎に，また人の影が集まってくる。若者もいる，白髪の人もいる，女の人もいる。身なりもまちまち，どうみても中学生には見えない人たちである。

小松川二中は，夜がくると，〈夜間中学〉になる。小学校，中学校も卒業できずに大人になってしまった人のための学校だ。

平木さんはいま，三十八才の夜間中学生である。

礼子さんが，こんな学校のあることを知ったのは，四年前だった。

片づけようと手をのばした広告のちらしのなかに，区の広報がまぎれこんでいた。こんな文句が目についた。

「働きながら学べる夜間中学　江戸川区平井３－20－１　684－0745」

幼稚園の娘も，もう小学生だった。

自分にはとうてい読めもしなければ書けもしない字を，どんどん習ってくる。見たこともない計算を教わってくる。でもこれは，目を細めて見ていてやればよかった。名札書きも，そんなにしょっちゅうではない。

ところがそれだけではすまなかった。学校からは，むずかしい字のならんだ通知がひっきりなしにくる。連絡帳を書いて持たせなければならない。

もっとやっかいなのはPTAである。いやでも人前へ出なければならない。きっと，読めない，書けないことが，ほかのお母さんたちや，近所の人にも知れてしまう。自分だけならまだいい。そんな目にはさんざんあってきた。だけど，こんな母親をもって，あの子は……。

このままでは，親らしいこともしてやれない。なんとかして学校へ行っ

て，読み書きだけでも習わねば，という思いが何かといえばこみ上げる。学校に通う夢まで見た。

その学校が平井にあるというのである。よかった。家から電車で二つめだ，ここなら通える。

しかし，広報をみて，すぐに学校に通い始めたのではない。そのとき末の男の子が二才だった。その子が幼稚園に入るまで，二年待たなければならなかった。

その二年間に，礼子さんは学校に行く準備をした。夜間中学は，お金はいらないのだが，それでも，外へ出かけるのだから，交通費もいるだろうし，着るものだって，いらないというわけにはいかない。ガード下の一ぱい飲屋へ働きに行った。学校に行っても家計の負担にならないだけのお金を貯めた

二年がたって，忘れもしない，去年の三月二十六日，とうとう入学の申込みに出かけた。よろこび勇んで出た筈が,途中から足が重くなってきた。書類を出されて書けといわれたら，ダメだといわれたら……どうしよう。

応対に出た先生を前にすると，わたし中学も出ていないんですという一言が，なかなか切り出せなかった。まるで警察に自首にでも来たような気持だった。

書類も字も書くこともなかった。いいですよ，四月から来て下さい。そういって，先生はにっこりした。

昭和二十二年，六・三制の教育は始まったが，まだ廃墟だった大阪の町には，靴みがきなどをして働き，学校に通えない子どもが大ぜいいた。心を痛めた生野二中の教師が，やむにやまれず彼等のために夜の授業をやったのが,夜間中学の最初である。「法にない応急の学校」と行政の目は冷ややかだったが，教師たちは，毎晩，授業をつづけた。

戦後の混乱がおさまっても，戦争の深い傷や貧乏や病気や，いわゆる落ちこぼれで勉強についていけないために，学校から切りすてられていく人

は，なくならなかった。

いまのような高学歴社会で，義務教育を終っていないと，どんな目にあうか。

まず，職につこうにも職種がかぎられてしまう。卒業証書がないから，調理師や理容師やマッサージ師の試験も受けられない。

読み書きや計算ができないということは，ただ不便なだけでなく，危険でさえある。役所の通知や手続きも読めないとなると，市民として当然の権利である法の保護もうけられない。

こういう目にみえる不利益のほかに，強い劣等感をもつようになる。まわりからバカにされるから，自分にとじこもりがちになり，弱いものは，精神をおかされてしまう。

世の中から貧乏がなくなったように見え，教育がこんなにさかえているようにみえる，そのかげに，大ぜいの切りすてられた人たちがじっさいにいて，そこからぬけ出したいと望んでいた。

そののぞみに応える学校は，役所がどんなにもぐりだと言い張ろうと，夜間中学しかなかった。だから夜間中学は今日まで三十年以上も続いてきたのである。

ベルがなる。昼間の中学と共用の八つの教室が静かになる。一教室に生徒が十人前後，思いおもいの席にちらばって坐っている。わざわざ，極端にみんなから離れたところに陣取る人もいる。

先生がやってくる。黒板の前に立つ。ここまでは，ふつうの授業風景だ。

しかし，さあみなさん，そろって，などという授業はできないのである。一人一人の学力がまちまちだから，どうしても，一対一の個人教授になっていく。

教室の隅に離れて坐っている菜っ葉服の男の人は，四十ぐらいだろうか，大きな背中を丸め額をおさえている。カナの書取りをしているのだ。しっかりにぎりしめられた鉛筆が，さっきからじっと止まったまま動かない。

先生がそばについて励ますようにのぞきこんでいる。

礼子さんは，ひらがな，カタカナはどうにかわかるが，漢字は自分の名前ぐらいしか書けぬ。先生は，字引きというものがあること，その引き方を教える。

しかし，辞書をひくのは，いうほどかんたんではない。字のどの部分を手がかりにひくか，一つがだめなら，つぎはどこを手がかりにするか。やっと画数を数えても，字引きに出ていない。先生にきくと，そこは続けて数えるのだという。

なれないうちは，ほんとうにイヤになった。ついめんどうになって，思わず，先生なんと読むの，とどなってしまう。世の中には，こんなに字があったのかとあきれてしまう。

ほかの学科でも，初めのうちは，内容よりも読むこと書くことが中心になる。理科の時間が，総武線や山手線など，みんながよく乗る電車の駅名の読み方の時間になったりする。

こうして，すこしずつ字をおぼえていった。街を歩いていると，看板や表札が読めるようになったのが分る。いろんな名前があるのもだなあとおもう。

「先生，字が見えます！」と叫んだ人がいた。今まで本を開いても，ちらちらしているだけで見えなかったのが，ちゃんと字が見えるというのだ。

学校の仲間たちは，礼子さんにとって二十何年ぶりで出会った，ほんとうに気の許せる友だちだった。

その仲間たちと字を書く練習をかさねているうち，われわれも，なにか文を書いてみないかという話が出た。まず自分のことを書いたらということになった。

その最初のきっかけは，入学式のときの先生のことばだった。

「となりに坐っている人と話をしようじゃないか。どうして義務教育の小学校中学校を卒業できないで，この夜間中学校に来なければいけなかった

のか」

人の話をきくことは，自分自身のことを話すことでもある。でもそれは，いつも忘れようとしてきた記憶をよびもどすことだ。なんで，いまさら恥をさらすのか，そう思った。

そんなとき，国語の時間に，先生が，先輩たちの文集を読んでくれた。これが二番目のきっかけになった。

古部江美子さんのこんな作品があった。

> 姉は文盲なのに／夜間中学校が大嫌いだ／夜間中学校へ行くのは／私は貧乏人ですと看板をぶらさげて／世間の笑いものになるだけだと言う／そして私に／夜間中学なんかへ行くひまがあったら／洋さいでも習って，さっさと嫁に行けと言う／そうしなければ，あんたも兄弟だとは／思わないと言った／私にはそれがかなしい／夜間中学に来ていることを／私はちっとも恥しいとは思わない／ここしか，私を相手にしてくれるとこは／ないからだ／結婚するにしても／私は夜間中学出身であることを／かくしたくないと言ったら／二度とこないでくれと言われた／田舎で漁師をやっている二十二才の弟からも／……これで私と姉弟の関係は切れた／これが貧困なんだ！／貧困だから／貧困だから／こんなふうにしか／生きていかれないんだ

ふと，子どもたちが，あのころの自分と同じ年になっていることに気づいた。子どもたちのためにも，自分の小さいときの話を書きとめておこうと思った。

母さんはどうして夜，学校に行ったのか，いつかわかってくれるだろう。つらいときの励ましにもなるだろう。

九時の授業が終る。そのあと三十分教室に残って，少しずつ書いていった。

托鉢僧だった父のこと。石ケンの行商に行った母のこと。空襲のサイレンの記憶―字引きをひきひき，思い出をさぐりながらだから，遅々として進まない。

学校にも行かずに守をした妹が死んだこと。リンゴ箱のお棺のこと，リ

ヤカーで運んで行った父の後姿のこと。電気も水道も止められたこと。弟の入学のことで役所に行って，弟も自分も籍がないと分ったときの屈辱。

書いていく途中，四年生のころ世話になった板橋の児童園の記憶をたしかめたくなった。それは生れて初めて，人間らしい生活，家庭のぬくもりというものに接したところだった。ついてきてくれた先生と大雪の中を探し回った。先生は，自分の先祖の歴史をたどる黒人の物語,「ルーツ」の話をしてくれた。

「私の半生」と題をつけた。この作文を書くのは，ずいぶん勉強になった。なにしろ自分のことを書くのだから，心の入れようがちがう。字引きで引く一つの字にも唇をかむような思い出がのしかかるから，書くたびに頭にしみこむ。新しい字や言葉をたくさんおぼえた。

そして，何よりも大きな収穫は，これまで，話す値打もないと思いこんできた過去を書きつらねてゆくうちに，それをのりこえてきた自分というものが，しだいに見えてきたことであった。

初めて持つ自信だった。人は誰も，つらかったことは忘れて生きようとする。そのにがい過去とまともに向き合ってとりもどした自信である。

礼子さんと初めて会って，これが貧しさのどん底で育ってきた人だとは誰も信じないだろう。明るい，笑顔のきれいなひとである。

通うというほど学校に行ったおぼえもなく，施設に入れられては連れもどされした六年間，それでも小学校は名目上は卒業ということになった。中学校には行かず，ずっと町工場を転々とした。中学生の年齢で働いていいわけはない。むろん内緒である。

結婚したのは，昭和三十七年，二十一才のときである。相手はおなじガラス工場につとめる職人だった。

「学校に行っていないから，結婚したら読み書きを習わせてもらいたい」といった。「それは子どもを育てて，手があいてからだ」という答えの裏に，礼子さんは，あたたかい何かを見たのだ。

昭和四十二年，長女が生まれた。二人で働いて生活も少しは安定してきた。四十五年には次女の雅子，四十八年には長男の一茂が生まれる。

ふたたび学校へ行く日は，こうして近づいてきた。

礼子さんはいま，本というものを，大げさにいうと発見したところである。

何気なく，学校の図書室から漢字に全部ふりがなのついた小説を借りてきた。有島武郎の「小さき者へ」である。ほんとうに，はじめて読む本らしい本だった。

知らない漢字は，一つ一つノートに書きこみ，読み方，書き順をおぼえながら読んでいく。いつのまにか，中味に引きこまれていた。

読み終わるのにふた月半もかかったが，わくわくするような新しい世界だった。

学校で習った詩が，たまたまテレビで朗読されたりする。その背景になった，行ったことも見たこともない土地が画面に映る。そんなときは，自分が習った一つの字やことがらが，いろいろな方向に広がっていって，いままでとじこもっていた殻が破れ，目の前がひらけていくような気になる。

夜間中学の授業は，夜の六時から始まる。だから，おそくとも五時半には出なければならない。帰りはどうしても十時になる。夜の一家だんらんの時間は日曜日だけになる。夫や子どもの顔に，いらだちやさびしさを見つけることがある。

こうまでして，という思いが頭をもたげる。すると，あの，目をつりあげて書いてやった，八年前の名札が目に浮かぶ。

ここで自分に負けたら，また前のみじめな私に帰ってしまう。夜間中学だけはどうしてもやり終えたいという気持ちが，また，たぎり始める。

下町の家並の上に一きわ黒い四階建の校舎に，今夜も灯りがともる。平

木礼子という名の三十八才の主婦が，三人の子どものお母さんが，三十年前にできなかったことをとり返そうとやってくる。

笑顔をつくって送り出してくれる夫と子どもたち，しんぼう強く一人ひとり納得がいくまで教えてやまない先生たち，ひとりぼっちだと思っていたところへ出会った百二十人の仲間がついている。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

この「お母さんは中学生」を私は２部から１部への転籍試験に使ったことがある。意地の悪い話だが，私は入試も重要な教育の一環だから，受験によって何か得るものがあったというものでありたいと考えたのである。ある受験生はいう。

「英語と論文，その論文の問題の原稿用紙を受けとって，愕然とした。２問中１問選択だが，一つ目は『インフレーションの原因について』，一目見て『あっ，こりゃだめだ』と直感。すぐ次の問題へ目を移す。『〈お母さんは中学生〉という別紙を読んで本学１部３年次入学を目ざす自分にとり夜間中学生とはどのような存在なのか社会科学的に考察せよ』，『えーっ，なにこれ？ちょっとお，あんまりじゃない？論文ということで受験勉強したマルクスの『資本論』はどうしたの？商品の二重性格，価値形態ets』それらが私の頭の中で激しく音をたてて崩れていくのがわかった。胸がドキドキ，ひや汗タラタラ。『いったい誰がこんな問題を出したのよーっ。私が今までやってきたことは何だったの？』とこの出題者を恨んだ。しかし，こつまでも恨んでいるわけにはいかない。時間がないのだから。とにかくこの〈お母さんは中学生〉を読まなければ…。読んでいくうちに，感動して涙が出てきて仕方がなくなった。自分を叱りつけながら答案を書いた。」

転籍試験の失敗は彼女の大きな転機となった。「あと半分しかない大学生活を有意義に過ごすため何かをしなくてはいけない。なにかをやりたい！」そして，ゼミに入った。「そこで初めて先生が書いた『学びへの旅立ち』という本を知った。読んでいくうちに，涙がぽろぽろ，いやぼろぼろあふれ

てきて，どうしようもなかった。ティッシュペーパーで涙を拭きながら読んだ。松崎運之助さんの『学校』（晩声社）も同じように『お母さんは中学生』の平木礼子さんが出てくる。『学ぶとはどういうことなのか』『本当の教育とはどんなものなのか？』ということを深く考えさせられた。」

彼女はいま，私のゼミで夜間中学の問題に取り組んでいる。２部コンプレックスは，あとかたもなく消えた。１部の学生が下校する登校時に，大学までの土手の道を下を向いて歩くこともなくなった。

20何年か昔，経済学部の町田移転によって，２部をどうするかが大問題になった。１部，２部に通教，加えて大学院を担当するというのは大変なことである。もともと２部というのは昼間来れない勤労学生が対象なはずなのに，現実はそういう学生はごくわずかで，圧倒的に１部を落ちた“1.5部”生である。

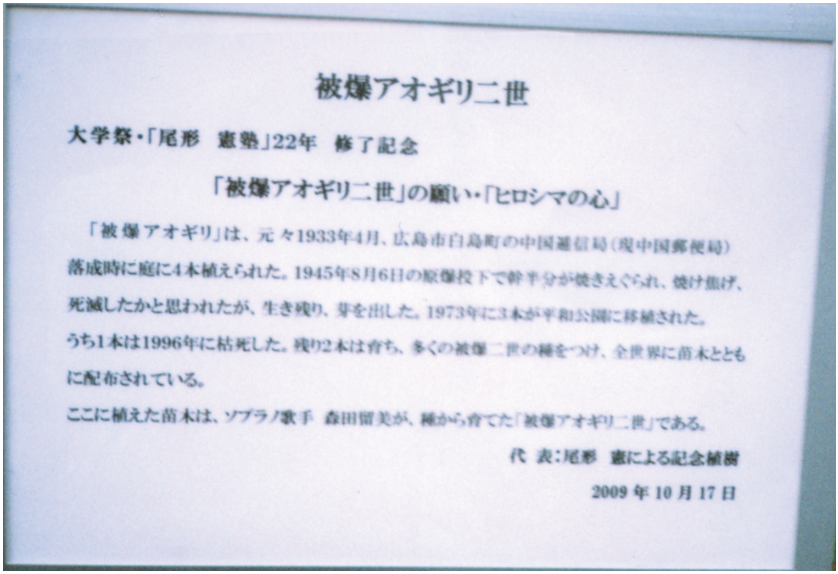
「この際思い切って２部は廃止し，身軽になって町田へという意見が強かったが，結局市ヶ谷に２部は残してということになった。そして「社会人入学」という特別の制度を設けることにした。英語などの学力では，受験勉強をせっせとやっていた連中にかないっこないから，面接など別な方法で受け入れようというわけである。これはみごと図に当たって，学ぶ意欲満々の学生を数多く迎えることができた。どうしてほかの学部でもやらないのか不思議に思ったことがある。だが，この社会人入学も，数年前の２部廃止とともに無くなってしまったわけである。

3. ある元職業軍人の“転向”の軌跡

今回は標題に見るように，自己紹介だが，86年の人生を１時間やそこいらで話しできるわけがない。いくつかのポイントをごくかいつまんで，ということになる。

私は1923年，仙台からほど遠からぬ大河原に生まれた。小学校は表門を

最後の尾形憲塾で歌う森田留美さん



被爆アオギリ二世

大学祭・「尾形　憲塾」22年　修了記念

「被爆アオギリ二世」の願い・「ヒロシマの心」

「被爆アオギリ」は、元々1933年4月、広島市白島町の中国逓信局（現中国郵便局）落成時に庭に4本植えられた。1945年8月6日の原爆投下で幹半分が焼きえぐられ、焼け焦げ、死滅したかと思われたが、生き残り、芽を出した。1973年に3本が平和公園に移植された。うち1本は1996年に枯死した。残り2本は育ち、多くの被爆二世の種をつけ、全世界に苗木とともに配布されている。

ここに植えた苗木は、ソプラノ歌手　森田留美が、種から育てた「被爆アオギリ二世」である。

代　表：尾形　憲による記念植樹

2009 年 10 月 17 日

被爆アオギリの植樹を記念するパネル

被爆アオギリの植樹祭に参加した人々

入ってすぐに天皇と皇后の写真を納めた“奉安殿”があって，行き帰りに最敬礼である。天皇は神様だと教えられたが，祖父は「明治天皇は偉かったが，大正天皇はバカだった」と言っていた。それなのに,「天皇陛下の御為に命を捧げる」のはごく当たり前，というより名誉なことと思いこんで（思いこまされて）いたのだから,教育の力は恐ろしい。それで小さい時から，軍人志望，それも演習などで身近に感じたせいか，陸軍だった。それでも，大正デモクラシーの余波でか，ゆったり，ノンビリムードが残っていたような気がする。「音も香も空へ飛んでく田植えの屁」,「嫁の屁は五臓六腑を駆けめぐり」（姑さんに気遣って),「風呂の屁は背中伝いに駆け上がり」（いつか実験したらお腹伝いだった),「汝らは何を笑うと隠居の屁」で大笑いしたり，関所で名を聞かれて，「オオバカメ」，役人をつかまえて大馬鹿奴とは何事かと怒ったら「大庭かめ」，次の男性は「コンドユウゾ」，今度ではない，今名前を言うのだと言ったら「近藤有蔵」，つぎの女性は「アリマセン」，名前がないわけないだろうに「有馬せん」など。そんな言葉遊びが子供たちは好きだった。

中学は仙台一中，今の仙台一高で，二中と旧制二高や陸士・海兵へどちらが多くはいったという進学戦争はすさまじかった。何しろ，いまどき聞いたことがないが，学期末の試験の成績で，クラスでの席順だけでなく，靴箱の名札まで入れ替えになり，学年ごとにクラスも変わるのである。そんななかでも，

Translate the following into Japanese.

Full it care coward to become me do note.

「充分に，それ，注意，臆病者，なること，私を（に），する，ノート」何これ？あんまり真面目に考えちゃいけません。フルイットケア　カワードトビカム　ミードウノート。

なんだ,「古池や…」じゃないか。

そのころ「旅の夜風」という歌が流行ったが,「花も嵐も踏みこえて／行くが男の生きる道／泣いてくれるなホロホロ鳥よ／雪の比叡をひとり行

く」というのを

Run over the storm and the flower. / Going is the man's living method. / Don't whisper horo-horo bird. / go alone Hiei under the moon.

と英訳（！）して歌ったりする。

入学の翌年の1936年，2・26事件があった。その同じ年に「阿部お定」である。英語の時間に「大使」の“ambassador”をみんなで「アベオッサダ」と“オ”にアクセントをつけて読み上げると先生も苦笑い。

不思議なことにそのころのノートが残っている。数の遊びとしてこんなのが残っていた。

いわく「超能力」。

何桁でもいいが，計算が面倒になるから仮に三桁としよう。だれかに好きな数字，それも432とか501とか，暗算しにくいなるべくでたらめな数を言ってもらう。次にその人でも別の人でもいいから，これもなるべくでたらめな同じ桁の数を言ってもらう。次は私が書く。また別の人に好きな数を言ってもらい，次に私が書く。この合計がいくらになるかを，最初の数が書かれたときにピタリといいあてる“超能力”である。

たとえば最初の数が823だとする。そこで私は，アラーの神でも，キリストでも，八百万の神でも，お釈迦様でもいいが，神様か仏様にお伺いを立てる。これがミソである。

「神様, この合計はいくらになるでしょうか」―ムニャムニャクシャクシャ，「神様がおっしゃるには，合計は2821になるぞよ」。つぎの人Aさんは451と言う。

私は548と書く。暗算するひまはない。そのつぎの人Bさんは209と言うと，私は間髪入れずに790。さて合計は2821になるでしょうか。

	823
Aさん	451
私	548
Bさん	209
私	790
	2821

首尾よく2821になりました。種も仕掛けもありません。超能力だもの，ということになる。実は種も仕掛けもあるのである。誰かが書いて私が書く，２番目と３番

目，４番目と５番目がそれぞれセットになる―もうおわかりでしょう。各桁の数字がどれを足しても９になるように書くのである。誰がどう書こうが，私が書く数と足して999＝1000－1，それが２回だから，初めの数プラス2000－2つまり2821が答えになるわけである。これは5回で終わっているが，７回なら3000－3，９回なら4000－4を最初の数に加えたものが答えになる。もしも4桁でやるなら20000－2，5桁なら200000－2…となる。ただ桁が多くなると，まんなかの数字がすっぽり同じで両端だけ違うのが目について，「あやしい」となるから，３桁くらいがいい。

また「暗算しにくいなるべくでたらめな数」というのも，ＡさんやＢさんが，222とか333といったのでは，こちらも777とか999とかいうことになって，これまたバレやすくなるからである。慣れてきたら，2000－2を加えず，例えば2000－3と１余計にへらしたらいい。それに伴って，こちらで書くとき，１回目か２回目で１の位は合計９でなく８にする。そのとき９を書かれると，こちらが０を書いても１多くなってしまうから，10の位まで操作して合計が98になるようにする。この辺になると，暗算をトチって失敗したりするから，ご注意のほどを。

その代り，こういうのがうまくやれると，もうなかなかバレなくなる。

	201
Ａさん	245
754	189
809	2198
私	790
	2821

ピースボートで500人近い人たちとベトナムへ行ったとき，ホーチーミン市で，戦争孤児たちが20人ばかり船に来て歌や踊りを披露してくれた。団長の挨拶というので，ちょうど４年生から中学の子供たちとて，“超能力”をプレゼントしてやったら，拍手喝采だった。やはりピースボートでキューバのチェ・ゲバラ高校を訪ねたときも，生徒たちにこれを教えてやって，みんなはじめはびっくり仰天，あとで大喜びされた。数字は万国共通である。

新幹線見切り発車の当節の授業では，こんなことはやるひまがないのか

しら。むしろ危険な“遊び”を持ち込むものとして，敬遠されるかもしれない。

中学から市ヶ谷の予科士官学校へ進んだのが16歳，今の高校生の歳である。ここで何よりも強烈な印象を与えられたのは数学のN教官である。微分積分そっちのけで日本精神を説くのに，私はすっかり魅了されてしまい，日曜ごとにご自宅を訪れた。松蔭神社へ連れて行かれたりして，日本が今いかに腐っているか，5.15や2.26の先哲がいかに偉かったか，を聞かされた。それからの私は毎日「軍人に賜りたる勅諭」を1節づつ墨での謹書を欠かさず，夜半密かに先輩の霊を祀った校内の雄叫神社へ詣でて座禅を組んだりする。日誌には「右翼トハ何ゾヤ，中正トハ何ゾヤ，右翼コソ中正ニ非ズヤ」と書くと，定期的に提出して見てもらう中隊長からは「右翼ハ右翼ナリ」中正ハ中正ナリ」と禅問答みたいな朱書が返ってきたりした。

予科卒業後，“満州”の航空情報隊で2ケ月実地見習をし，本科の陸軍航空士官学校にはいったのが41年6月である。2年間の前期1年は操縦・技術・通信の各分科をひとわたり実習する。後半の1年が各分科に分かれての専門教育である。

ここでは，学科の教育そのものより，入学早々の運動会での棒倒しの棒の代わり人間が立ってその頭が地面についたら負け，ルール一切なしでぶっ叩いても絞めても何をやってもいい，という大将倒しが思い出深い。それとT中尉が週番になると，非常呼集（私たちはこれを“非情呼集”と言った）で毎晩2度叩き起こされて，剣術，大将倒し，飛行場外一周1万2600メートルの区隊毎の駆け走などをやらされる“鍛練週間”である。T中尉は軽爆の操縦者で，後で“満州”で急降下爆撃の訓練中僚機と接触して亡くなった。

43年6月航士校卒業，19歳で新品少尉，今の大学1年生の年ごろである。ジャワの航空通信隊で，みんな年上の兵隊さん7～80人の有線小隊長で苦労した。翌年水戸の陸軍航空通信学校へ帰り，みっちり実戦に備えた勉強・訓練をして，44年11月今度はフィリッピン・マニラの第4航空軍司令部へ，

もうレイテ戦で日本軍は壊滅したころだった。情報を担当したので，連日同期生らが特攻として出陣する前日，艦船情報など聞きにやってくる。「あっ，今度は貴様か」だが「行って来いよ」とは言えない。もう帰って来ないのだ。翌日「ワレトツニュウス」という電報の入る日々だった。年が明けて，20日間ばかり歩いて北ルソンへ移動である。司令部のごく1部だけが台湾に移れたが，水戸を卒業してこの司令部へ一緒に赴任したほかの2人の仲間はこの移動中米軍機にやられた。結局航空軍は解散，私は南京の第5航空軍司令部付となる。

だが，もう本土決戦ということで，航空軍の主力は朝鮮へ，司令部は京城（今のソウル）へ移転する。敗戦の「玉音放送」は北朝鮮の威興で聞き，防空壕へ入って軍刀を腹に充てるが，思い直して刀を鞘に納める。翌日京城へ戻り，シベリア送りにはならなかった。朝鮮なので帰国は早かった。「世論に惑はず政治に拘らず」の軍人勅諭だったから，帰国後政治・経済・宗教・社会・文学等々，ありとあらゆるものにとびついてムチャクチャ勉強した。質量不変の法則・エネルギー不滅の法則はウソ，時間と空間は相対的，光は波でもあり粒でもあるという驚きの連続に，湯川秀樹さんのノーベル賞受賞もあって理論物理を志したこともあった。

職場は鹿児島の引揚の仕事から郷里に帰ってラジオ屋，レントゲン技師，上京してまたもやレントゲン，英字新聞の外交員，興信所の翻訳，無線技師と，転々とする。「働けど楽にならざり」どころか働こうにも仕事がない資本主義の矛盾の解決を経済学に求め，法政大学の通信教育に入学したのが1951年である。大学でのほんとうの勉強はゼミと思い込んで欲張って4つもとった。マル経が何か，近経が何かわからないままである。私はケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』にひとときチャームされ，これで資本主義の矛盾が解決できると思ったが，読み進むうちにそれが誤りであると知った。マルクスをはじめからやろうと思っていた時，卒論に「アダム・スミスの分業論」があるのを知り，これに取り組んだのが，久留間鮫造先生との出会いとなった。そこで学問の厳しさと同時に面白さを知っ

たのである。

無線の仕事をしながら大学院を３年かけ，もっと勉強したいと受けた助手試験が，何の間違いか合格とあって，以来38年法政大学に住みつくことになる。そんなわけで，はじめは授業も研究もマルクス経済学の理論関係だったが，法政の教職員組合の役員をやったのがきっかけで，私大問題，さらには教育問題一般に首を突っこむようになり，授業も「資本主義の矛盾の投影として教育問題を考える」教育経済論ということになる。だが，「教育の荒廃」と空々しい文句を唱えるより，さまざまな教育の現場で悪戦苦闘している人たちのナマの話をしてもらった方が学生へのインパクトが強いだろうと，77年度からゲストをお招きして話をしてもらうようになった。夜間中学，予備校，養護学校などの教師や生徒である。それと関連する映画も上映した。授業のもう一つの特徴は，手続きもせず，聴講料も払わない「モグリ」の奨励がある。これは大教室の授業でもゼミナールでも，学生証を持っている「ホンモノ」の学生にいい刺激となった。ゼミでのリーダーシップでは，こちらから助手手当を払いたいぐらいである。

1977年から２年ばかり東京・三鷹の明星学園の理事となり，教育顧問の遠山啓先生と知り合った。明星はこのころ小４年・中４年・高４年という４・４・４制度をとっており，小と中では，遠山さんの考えに沿った「点数・序列のない教育」をやっていた。国語・算数・理科など，普通どの教科もテストをして点数をつけ序列をつけるが，それだと，先生も子どもたち同士も「あの子はオール５の子」「オール1の子」「できる子「できない子」と点眼鏡で見るようになる。10字書き取りをやって，１つできないとき９点という点数をつけて返すのでは点数にだけ目を奪われてしまう。そうではなく,「お前は○という字が書けないからちゃんと練習しなさい」と一々説明してやる。だから通知表も点数ではなく,「分数の割り算」が教師の評価と自己評価で「よくできる」とか「不十分」とかいうことになる。評価は必要だが，評点は有害無益だというのである。おまけに各教科の点数を足したりするのはメートルとキログラムとリットルを足すようなもの

だ。人はそれぞれ才能は千差万別である。これには私は驚きだった。まったくそのとおりだ。だが，ただ，小・中では通用しても，大学への内申書に，５がいくつ以上とか，平均4.5とかつける高校ではこれができない。社会へ出ても，今の世の中はすべて点数・序列の世界である。当然のこと，明星で小・中と高の教育に矛盾があり，「一貫教育」が「不一貫」「看板に偽りあり」，オーバーに言うと「詐欺」ということになる。このため高校は中学からの内部進学者に「内部進学予備テスト」を行ない，父母の坐り込み・ハンストにまでなったことがあった。

遠山さんを高校長にお迎えしようという話が理事会で持ち上がったが，高校ではこれを拒否する。遠山さんは「高校を作った方が早い」とおっしゃって，私の「点数・序列のない学校づくり」が始まった。その経過については私の『もうひとつの学校』（有斐閣）を見ていただきたいが，３年間すべてを犠牲にして225回関東一円から長野まで足を運んだのも失敗に終わった。だが，これを受けて造られたのが埼玉県・飯能の自由の森学園である。学校づくりに失敗はしたが，遠山先生との接触で私は得たものは非常に大きかった。

遠山さんは，当時明星学園小中の教師Mさんと，算数が１とか２とかの成績の子どもたちだけを集めて合宿したことがある。本当は中学でやることだが，（—）×（—）がなぜ（+）になるのかを「赤と黒」というスタンダールもどきのトランプ遊びでやる。ハートとダイヤは赤だから赤字でマイナス，スペードとクローバは黒だからプラス（逆に前者は明るい色だからプラス，後者は暗い色だからマイナスでもいい），そしてマイナスとは借金，プラスとは手もとにお金があるということだ。〇円じゃピンとこないから〇億円にしよう。ババ抜きの要領で切った札を配り，ジャンケンで勝った人からはじめて順に隣から札を引いてゆく。自分の手持ちの札がプラスばかりになったりして，みんなのうちプラスマイナスして最高になっていると思ったらストップかける。プラスの大きい札を引いたときやマイナスの大きい札を持っていかれた時など，いつストップをかけてもいい。合

計点を出しあってその人より多い人がいたら，ストップをかけた人はビリというのは41や51と同じである。はじめに４種類の同数までとしてカードを配れば，ストップでカードを見せ合ったときにプラスマイナスゼロになるはず。検算ができるのである。もしゼロにならなければ，誰かが計算を間違えているから，やり直しをしてみるということになる。

なるほどマイナスを引かれるとはトクだということ，５億円の借金をもって行ってくれるのは５億円のトクになるのだということがわかる。それを２遍やられたら（－5）×（－2）＝10億円, 10億円のトクになるわけだ。

前にも何度か「尾形憲塾」でこれをやったが,「なぜ？」を教わったという学生は１人もいなかった。みんな「（－）×（－）＝（+）と覚えなさい」である。支配―服従，タテの関係では面白くなるはずがない。NHKのアナウンサーが塾が終わった後の生徒に「どう面白かった？」と聞いたら「うん，とても面白かった」。「学校の算数は？」「全然面白くない」本当は面白いはずの「学び」を面白くなくさせているのが今の公教育ではあるまいか。

教師といい，子どもといっても，人生経験と知識の差があるだけだ。あの偉大なニュートンが言ったという。「私はたまたますべすべした小石やきれいな貝をみつけて喜んでいる子どものような存在にすぎない」広大無辺な真理の大海の前にあって, 人間はそんなちっぽけな存在でしかないのだ。（－）×（－）がなぜ（+），はテクニックの問題ではない。学びの本質に迫る問題である。

中世の十字軍のあと東西の貿易が盛んになり，法律の知識が必要となった。イタリアのボローニャに法律のえらい先生がいた。パリには女子学生と熱烈な恋愛をしたアベラールという哲学・神学の先生がいた。また，イタリアのパレルモは有名な医学の先生がいた。そこで学生たちはアルプスをこえ，ドーバー海峡をこえて，ボローニャへ，パリへ，パレルモへ学びにゆく。こうして学びたい人とこれに応える人との集団をunversitas（＝union）と呼んだ。英語のuniversityの語源である。大学はもともと建物で

も制度でもない，このような学びたいという人たちとこれに応える人たちの集団だったのである。

そうしてみれば，ピースボートへのかかわり，法政自主夜間中学，法政平和大学，モグリ，どれを見てもほんものの学び場をつくり出そうという私のささやかな試みだったのである。

教育評論家の斎藤次郎さんは言った,「遊びには三つの要素がある。楽しいこと，それ自体が目的，自発的」やっていて苦痛では遊びにならない。資格を得るための遊びじゃおかしい。人から強いられて遊ぶのでは何のためか判らない。しかし考えてみると，ほんとうの学びはこの３要素がピッタリなのである。「よく学びよく遊べ」と言うが, 実は「学び＝遊び」なのではないか。

人間には，C（Childhood）: 幼児期―E（Education）: 教育―W（Work）: 仕事―R（Retirement）: 引退というライフサイクルがあると今までは考えられてきた。だが，労働することも立派な教育の一環ではないか。年をとってから面白いものを見つけて学ぶ，当然のことではないか。そうして考えると，このライフサイクルはまぜこぜにして，とくに「まなぶ」」については，人生いつの時期でもあっていい，というよりなくてはならぬものとすべきだろう。「生涯学習」（lifelong learning）の思想である。スウエーデンには「25-4」（“twenty-five－four”）という制度がある。25歳以上で職業経験か家庭歴が４年以上であれば，大学はフリーパスで入れる。そこでストックホルム大学では70歳とか80歳でも，ドイツ文学やスペイン語を学んでいるのは当たり前のことで，定年以上の学生が5人に１人はいるという。卒業免状がモノをいう学歴社会でなければ，何も高卒ですぐ大学へ行く必要はない。学びたいときに学べばよいのである。それで高等教育就学率（「年齢にかかわらず実際に修学しているものを当該就学年齢層の人口で除したもの」）は75％になっている。

キューバは幼稚園から大学まで教育は一切無償だが，それでも高校から大学への進学は半分ぐらいという。ところが，たとえば『世界国勢図会』

での高等教育の就学率は109％（2007年）となっているから，成人が大きな割合，それも通信教育が大きいと思われる。単位や資格にとらわれないで勉強できるからである。この数字が100％をこえているのはほかにない。

学ぶことによって人間は成長する。私は生ある限り学び続けたい。行動し続けたい。

「君よ歩いて考えろ」（宇井純）

最後に，昔仙台一中のころ好きだった限りなく黒人の愛したS.フォスターの歌。

Old Folks at Home

♪'Way down upon de Swanee ribber,
Far, far away,
Dere's wha my heart is turning ebber,
Dere's wha de old folks stay.
All up and down de whole creation,
Sadly I roam.
Still longing for de old plantation,
And for de old folks at home.
All de world am sad and dreary,
Eb'ry where I roam.
Oh, darkeys, how my heart grows weary,
Far from de old folks at home.

４．アオギリの願い

森田　留美

丁度10年前，ピースボート27回クルーズでの夕食のテーブルが，尾形憲先生と御一緒でした。水先案内人テーブルでしたので，尾形憲先生，ルポライターの鎌田慧先生，反核法律家協会の大久保賢一先生，勝俣誠先生，夕食時はたちまち議論がはじまり，何もわからない私は，無知を恥じると同時に，日夜一生懸命平和の為に働いていらっしゃる先生方と何か御一緒出来たら良いな，音楽を平和の為に役立てられたら良いなと考えはじめました。

尾形先生は，音楽がお好きで，私のピースボートでの仕事，ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」の大佐役を希望され，誰よりも熱心に練習に参加して下さいました。

そして船を降りた後，度々電話やFAXで「私の人生最後の仕事です。是非『イラク派兵は違憲―市民訴訟の会・東京』の原告になって下さい」と強く勧めて下さったのです。

遂に参加させて頂く事に決め「この合宿に参加すれば裁判の事がすべてわかります」と伺い，箱根の毎日新聞の山荘で実施された合宿に，小さなキーボード持参で参加致しました。

「お気持ちを詩か文章にして頂けましたら，すぐに弾き歌い致します」と申し上げたら，ある方が一生懸命詩を書いて下さったので，早速キーボードで弾き歌いさせて頂きましたら，皆様，感動，興奮して下さり，「森田さん，裁判所で歌で陳述すれば良い」と，盛り上がってしまいました。そして合宿の帰り道，平和学の岡本三夫先生が，「原爆詩を歌ってみませんか」と，勧めて下さったのです。音楽を平和に役立てるのにピッタリだと嬉しくて，広島へ行き，栗原貞子先生の素晴らしい原爆詩「〈ヒロシマ〉というとき」，「生ましめん哉」，御庄博実先生の劣化ウランに関する素晴らしい詩を教えて頂きました。

「イラク派兵は違憲―市民訴訟の会•東京」の法廷で，静かな物腰で鋭く発言なさる黒滝正昭先生に出会いました。裁判が終わると，優しく挨拶して下さり，急いで新幹線で仙台に日帰りされました。

栗原貞子先生の「〈ヒロシマ〉というとき」は，日本の戦争責任に真正面から向き合った，素晴らしい詩です。アジアの方々にこそ，心を込めてこの詩の心を伝え，謝罪して，新たに平和を目指す友情を育んでいけたら良いな，と，この詩を韓国語，中国語，等々に訳して頂き，それぞれ違うメロディーになりますが，歌わせて頂いて居ります。英訳は，すでにあったので，ロシア語（今度ベラルーシで歌わせて頂きたいです），スペイン語にも訳して頂きました。そして国際交流，世界中の方々と仲良くなる為に，思いきって，打ち掛けを購入したのです。世界中の女性は，きっとおしゃれが大好き，そして，着物には美しい日本の文化芸術の粋が結集されています。世界中の方々に御覧頂き，触れて頂き，羽織って頂き，日本に友情を感じて頂きたいのです。そして又，戦争により婚約者を失い，花嫁衣装を着る事が出来なかった，被爆されたおばあちゃま達に羽織って頂き，語って頂き映像を残していきたいと思います。ピースボートに再び乗せて頂いて世界中で，この「〈ヒロシマ〉というとき」を各国の言葉で，打ち掛けを羽織って歌わせて頂きたく夢見ております。「原爆詩を歌う為，肌で何かを感じ，学びたい」と，広島に通う間に，被爆アオギリを知り，沼田鈴子さんと出会いました。

鈴子さんは，素晴らしい女性です。いつも輝く笑顔で人々に勇気を与えていらっしゃり，私も鈴子さんにお会いしたら，胸がいっぱいになり，頑張ろう！と思えるのです。

元気なおてんば少女だった鈴子さんは，婚約者を戦争で失い，被爆して大ケガをし，「すぐに足を切断すれば，命は助かる」と言われ，死を直前にした方に「あなたは足を切れば助かるんだから，切って，生きて！」とはげまされ，麻酔もなしにノコギリで足を切り落とされたのでした。大変な思いをして外で歩くと，子供達にひどい事を言われるし，「死んだら楽にな

る」と死を考える日々，ご家族の方々は彼女が自殺しない様に後ろにかくれて見守っていらしたそうです。と，真黒に焼けただれたアオギリの樹が芽を出した姿と出会われたのでした。鈴子さんは「生きるんだよ！」と樹が話しかけてくれたと感じ，生きる勇気が湧いて来られ，一生懸命勉強されたのです。そして先生になり，沢山の子供達を教えて生きて来られました。沢山の教え子の中に栗原貞子先生の命の大切さをうたいあげた，有名な素晴らしい詩「生ましめん哉」で現実に生まれた小嶋和子さんもいらっしゃいました。ここに二つの詩を記させて頂きます。

「〈ヒロシマ〉というとき」

栗原　貞子

〈ヒロシマ〉というとき
〈ああ　ヒロシマ〉と
やさしく答えてくれるだろうか
〈ヒロシマ〉といえば〈パールハーバー〉
〈ヒロシマ〉といえば〈南京虐殺〉
〈ヒロシマ〉といえば
女や子供を壕のなかにとじこめ
ガソリンをかけて焼いたマニラの火刑
〈ヒロシマ〉といえば
血と炎のこだまが　返って来るのだ
〈ヒロシマ〉といえば
〈ああ　ヒロシマ〉と
やさしくは返ってこない
アジアの国々の死者たちや無告の民が
いっせいに犯されたものの怒りを噴き出すのだ
〈ヒロシマ〉といえば
〈ああ　ヒロシマ〉と

やさしくかえってくるためには
捨てた筈の武器を　ほんとうに
捨てねばならない
異国の基地を撤去せねばならない
その日までヒロシマは
残酷と不信のにがい都市だ
私たちは潜在する放射能に
灼かれるパリアだ
〈ヒロシマ〉といえば
〈ああ　ヒロシマ〉と
やさしいこたえがかえって来るためには
わたしたちは
わたしたちの汚れた手を
きよめねばならない

72年5月

「生ましめん哉」

栗原　貞子

―原子爆弾秘話―

壊れたビルディングの地下室の夜であった。

原子爆弾の負傷者たちは暗いローソク一本ない地下室をうずめていっぱいだった。

生ぐさい血の臭い，死臭，汗くさい人いきれ，うめき声。

その中から不思議な声がきこえて来た。

「赤ん坊が生まれる」と云うのだ。

この地獄の底のような地下室で今，若い女が産気づいているのだ。

マッチ一本ないくらがりの中でどうしたらいいのだろう。

人々は自分の痛みを忘れて気づかった。
と，「私が産婆です。私が生ませましょう」と云ったのは，
さっきまでうめいていた重傷者だ。
かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた。
かくてあかつきを待たず　産婆は血まみれのまま死んだ。
生ましめん哉
生ましめん哉
己が命捨つとも

20年11月25日

この二つの素晴らしい詩を沢山の方々に味わって頂き，皆で「平和の為に私は何が出来るか」考え，それぞれが何か行動する。その輪が広がっていく事で，より良い未来を創っていく事が出来ると信じて歌い続けていきたいと思っています。

2006年４月12日「イラク派兵は違憲―市民訴訟の会・東京」東京霞ヶ関地裁民事28部706法廷で結審の日，最終陳述で，「〈ヒロシマ〉というとき」を朗読まじりで韓国語と日本語でアカペラで７分間止められる事なく歌えた事も忘れられません。

ICBUW世界大会広島で歌わせて頂き，劣化ウランの恐ろしさを思い知りました。ICBUWで出会った振津かつみ先生に誘って頂き「チェルノブイリ救援関西」に参加させて頂く事になり，ベラルーシの少女の詩も歌わせて頂きました。バレリーナの小谷ちずこ先生と出会い，二人で詩を読んでイメージをふくらませ，二人で同時即興，私が詩をピアノで弾き歌い，彼女が踊って舞台に乗せる事が出来ました。モンゴルの歌姫オユンナさんが歌われた「ヒロシマの少女の折鶴」も耳コピーで再生，編曲して彼女と創作致しました。広く人々にウラン兵器，原発の恐ろしさを認識して頂き，支援につながる様なDVD，CDを製作したいと思って居ります。

尾形憲塾で歌わせて頂き，話させて頂けて本当に有難い事でした。一回

目の時は学生さん達と共演，伴奏ピアノ，フルート，歌，踊り，と楽しく練習させて頂き，純粋な心の学生さん達のレポートも拝見させて頂き，「伝わっているんだ」と，とても嬉しく，勇気を頂く事が出来ました。二回目の今回は放送部員の学生さん達にも手伝って頂き，沼田鈴子さんに頂いた絵本「アオギリの願い」をアムネスティ・インターナショナル日本の寺中誠さんに作って頂いたパワーポイントと，情景心理描写の即興BGMピアノ（宮城学院女子大学音楽部作曲科の小山先生がいつも親切に電子ピアノを貸して下さり，本当に有難かったです）をバックに朗読して頂く事も盛り込みました。

そして黒滝正昭先生の退職を前に最終回の「尾形憲塾」であるので，尾形憲塾の魂を大学に残せたら…と「被爆アオギリ２世の植樹を大学で実現させて下さい」と黒滝先生にお願いしたのです。黒滝先生は「実現に向けて一つ一つ手順を踏んで行きましょう」と大学に植樹希望を申請して下さり，学院長先生に植樹願いを提出して下さいました。尾形憲先生は喜んで大賛成して下さり，８月に私が広島で「沼田鈴子さん　86才の誕生日を祝って激励リサイタル」させて頂いた折「宮城学院女子大学に尾形憲先生の手で被爆アオギリを植樹して頂きたくて，学院長先生に植樹許可を申請中なの」と沼田さんにお話したら，「まあ，嬉しいわねぇ。尾形先生お元気なのね。ピースボートで度々御一緒させて頂いていたのよ。特攻隊を日々見送った先生の手で大学に植えて頂けて，学生さん達に育てられ，アオギリが皆に命の大切さ，平和の尊さを伝えていってくれるのね」と，つぶらな瞳を輝かせて喜んで下さいました。そして，遂に黒滝先生から学院長先生から植樹の許可がおりていますとの内容のメールが届き，とても嬉しく，発芽に一年もかかった鉢植えの被爆アオギリを持って仙台に参り，黒滝道子さん（黒滝先生のお嬢様）に手渡し，黒滝先生と，尾形憲塾最終回の打ち合わせをさせて頂き，所用の為私が一週間，大阪に戻っていた間，鉢植えの被爆アオギリは黒滝先生に大切にお世話頂いたのでした。又，三年前の尾形憲塾で，少し被爆アオギリの事に触れた時，粒を希望して下さった

方々に差し上げたのですが，黒滝先生のお家のお庭でも被爆アオギリは元気に芽を出し成長しているとの事で，とても嬉しく思っています。

10月17日尾形憲塾最終回当日，東京から元気に新幹線で仙台にいらした尾形先生,「モグリのニセ学生こそ資格目当てでなく学ぶ事を純粋に求めているホンモノの学生である」等々,興味深いお話を沢山して下さいました。

そして宮城学院女子大学研究科の卒業生渡邉千晶さんがピアノ伴奏で協演して下さったオペラ，オペレッタを含め，原爆詩の弾き歌い，トーク，放送部員の学生さん達とセッション「アオギリのねがい」を発表させて頂いた後，いよいよ被爆アオギリの植樹，大学の美しい庭園に，植木屋さんがきちんと準備して下さり，指導して下さり，尾形先生が植樹，そして参加者全員がスコップで土をかけて，和気藹藹と植樹出来，２本のアオギリの苗の横には，黒滝先生が考えて下さった被爆アオギリのプロフィルが書かれた立派な立て札が！　本当に嬉しく有難く，胸がいっぱいになりました。

実行委員の学生さん達が「被爆アオギリの苗，大切に育てます。時々様子をお知らせしますね。つらい時はアオギリの樹に勇気をもらいに，ここに来ます」と言ってくれました。彼女たちを含め，尾形先生，黒滝先生と先生のお兄さま，お嬢さま，非暴力平和像のメンバーで聴講して下さった方，山形で美術を勉強中の私の次女と私で飲みナールでの楽しい集いも無事終わり，黒滝先生より「大学のホームページに〈尾形憲塾〉が写真入りで公開されています！」との御連絡頂き，有難くホームページを拝見し，今は学生さん達のレポートを拝見しているところです。

―――「ヒロシマの心」をアメリカやアジアに伝えて世界平和を祈るということは，自分に返ってくる炎に焼かれることなしに出来ることではない，厳しい現実があります。そこから逃げず，そこに立ち向かう勇気を与えてくれるのが，被爆して幹半分が焼きえぐられ焼け焦げてもなお生き残った「被爆アオギリ」であり,その生命を受け継いだ「被爆アオギリ二世」なのです。宮城学院の学生・生徒・教職員たちに「ヒロシマの心」が宿っ

て，建学の精神にある「世界の平和に貢献する女性」が育ってくれることを願わずにはいられません。――　ホームページの文章より

尾形憲塾に参加させて頂けて，純粋な心の学生さん達のレポートに励まされ，私は幸せです。尾形憲先生が誘って下さった，この道を，音楽と出会いと学びと共に，一生懸命，楽しく歩いていきたいと思って居ります。

昔，ピースボート船上で鎌田慧先生が書いて下さった言葉です。

「夢を歩く」

核廃絶，戦争のない　自由で平等な世界を目指し，皆で力を合わせ，夢を失う事なく歩いて参りましょう！

未来は私達の手で創りあげていく事が出来るのです。

５．受講者の声

実行委員長　寺口香央里

私はこの尾形憲塾を終えてみて，黒滝先生の基礎演習を選択してよかったと心から思いました。理由は二つあり，一つは，基礎演習を学んでいなかったら尾形先生とも森田さんとも出会うことはなかったからです。また二つめは，戦争に関して考えることができたからです。

尾形先生のお話からは，私たちが聞かなきゃ知らない真実や，過去の出来事などを知ることが出来ました。また先生の本からも，たくさんの悲惨な写真を見たり，事実を知りました。私はこのことを知り，一人でも多くの人にこの現実を知ってほしいと思いました。それが一番後世に伝えるために大切なことだと思ったからです。今の現代の若者が戦争について考え，行動するためには，まず，知ることが必要であると感じました。

森田さんの歌声は素晴らしく，透き通っていてかつ迫力がありました。改めて歌の魅力というものを感じました。私は，このような戦争に関しての歌を聴くのは初めてのことで，聞いて鳥肌がたつ思いでした。現実とは

残酷だと感じました。

いま，世の中は「戦争」というものを忘れていると思います。世代が代わり，私も含めて戦争を経験していない人ばかりになっているゆえだと思います。戦争を経験していない，それはとても良いことです。しかし，忘れてはいけないものがあるはずです。受け継いでいかなければならないものもあるはずです。それこそ戦争という過去です。そのためには，きちんとした教育が必要になってくると思います。過去の歴史を学ぶときに，ただの善悪や勝ち負けで判断し，自分たちは正しい，悪いのは向こうだ，などといった偏見やイデオロギーを持たせるようではいけないと思います。そのような教育ではいつかまた，戦争が起きてしまうと思います。

私たちはこれから先も，戦争を経験しない確率の方が高いと思います。そんな私たちが戦争と向き合うにはどうしたら良いのでしょう。私は三つ考えました。一つめは，戦争経験者の話によく耳を傾けて聞くこと。やはり直接聞く方が内容が現実的であり，理解しやすいと思います。二つめは，戦争経験者からの話を後世に伝えていくこと。貴重な経験者からの話を絶やさないように後世に伝えていく仲介役は重要な役目だと思います。三つめに，日々常に自分には何ができるか考えて行動すること。心持ち一つで行動も変わると思います。私は戦争という悲惨な出来事を繰り返すことのないよう，私にできることとは何かを考えて行動していきたいです。

実行委員　絵本「アオギリの願い」朗読者　佐々木　茜

22年間続いた「尾形憲塾」の最終期に，実行委員として，また絵本「アオギリの願い」の朗読者として参加させて頂きました。

本学の黒滝正昭教授が，尾形憲編著『学びへの旅立ち』を教科書に使い，演習を行ってくださっていました。その演習の中で学生が「年に一回の大学祭で尾形憲教授を本学に招いて講演をしていただいたらどうか」といったことから始まったのが「尾形憲塾」です。このアイディアから，22年間

休むことなく黒滝教授が続けてこられ，そのおかげで私が最終期に携わることができました。

当日の公演は，私にとってとても刺激的に感じられ，また楽しみながら幸せな時間を過ごすことができました。

絵本「アオギリの願い」の朗読では，練習の際から感情移入してしまうほどでした。

ヒロシマの原爆で，思わず目を瞑ってしまいそうな絶望の現実の中から物語が始まります。原爆により，ボロボロになってしまったアオギリが芽を出し，その生命力によって人々は勇気づけられ，少しでも心が治癒したという内容です。その「被爆アオギリ二世」が本学に植樹されました。私はこれから卒業するまで，このアオギリの成長を見て，辛くなったときには元気をもらおうと思います。

私は，尾形先生著作の本から「学ぶことの意味」と「本当の平和」について考えさせられました。

最後に「出会い」と「学び」に感謝し，感想文といたします。

尾形憲先生，黒滝先生，本当にありがとうございました。

お疲れ様でした。

最終期　尾形憲塾を受講して

森田留美さんの歌声とともに

食品栄養学科　１年　Bクラス　1509240　馬場照子

戦争の悲惨さが印象強く私の中に入ってきた。お国のために亡くなった軍人・軍属の方達の２/３が餓死であったことも驚きであった。シベリア送りになった人たちは，便から稗粟を取り出して食べるほどであったのか。また，ロシア人のおもちゃになるならと娘三人を自殺させた話。娘四人息子一人を持つ私にとって強い衝撃となった。お国のために，戦略のために，兵士や本土にとどまった方達のみならず，移民していった方達の惨めさは

推し量る術もない。

いつでも戦争の話で耳にするのは自分たちが辛かったこと。日本という国からの視点である。先人達の辛い思いを否定する気持ちはない。ただこれからの世界社会を生きていく私たちは，前述とは反対の視点からも捉えていかなければと思う。それは，占領という名の下に被害を与えてきた日本の存在である。森田さんが歌ってくださった“〈ヒロシマ〉というとき”はそれらを全て語っていると感じた。

第二次世界大戦といえば，原爆を投下された印象が大きく，日本人の多くは被害者という意識が強いように思う。ここ最近になって，日本人が大戦中に行ってきたことが多少，公にされるようになってきた。しかし，一般の人々には極々一部しか伝わってこない。自ら深く調べなければ知り得ないことが多々ある。これだけメディアは様々なことに大騒ぎしているのにである。日本が島国であるということも，世界から隔離された考えを持ってしまう理由の一つである。独自の思想を持っていることは，時によっては素晴らしいことであろう。しかし，だからと言ってご都合主義であっていいわけがない。戦争を知らない私たちも，日本が何をしてきたかをしっかり理解する。その上でアジアに対して，パールハーバーに対して心からの謝罪をする。そこで私たちは漸く，憲法第９条の重要性を噛みしめることが出来るのではと感じた。私たち日本人の謝罪があって初めて，世界に第９条を発信出来る資格を得るのだと確信した。

ところで，尾形先生のお話で，資本主義の最期は戦争しかないという一考があった。それは，常日頃私も危惧していた思いであった。

昨年のアメリカ発金融恐慌が一落ち着きした頃，各国のGNPについてNHKラジオで取り上げていた。中国が初めてマイナス成長率になったという話題であった。ただし，成長率はマイナスでも，生産量・需要ともに確実に伸びている。その中国や，需要の増え続けるインドの経済に各国がどう食い込んでいけるかですよね…といった筋のものであった。

日本は技術革新による高度経済成長を繰り返してきた。そしてその伸び

が鈍化してくると，消費意識をくすぐり，企業と国とが一体となって，無理矢理のように需要意識を作り出していった。狭い日本では行く先が見えてくると，世界市場へと拡大進出していった。

供給し続けなければ企業は生きていけない。学生時代，経済をかじり始めたばかりの頃, 継続することが企業であり経済であると学んだ。しかし，この消費することが美徳となってしまった経済でいいのであろうか。ここに，生態系の問題，地球環境，人の心と身体，戦争等々数多くの問題の起源があると言って過言ではないと思う。この誤った経済の大きな歯車を誰が止めることが出来るのであろうか。常日頃このような疑問を抱いていた私にとって，尾形先生と森田さんのお話や活動は心の励みとなった。多くの方達が，これではいけないと旗印を挙げ，行動を起こしていらっしゃる事がわかったかである。

講演の後，尾形先生に稚拙ではあるが，質問をさせて頂いた。「いまの問題は，資本主義・共産主義という問題ではないと思う。心の問題と自分は考えるのだがどうでしょうか」と。わずかな時間の中，余りにも短絡的な質問をしてしまった私に，先生は丁寧に答えてくださった。「Warm Heart & Cool Head. が必要なのです。経済学の出発点は資本主義の悲惨な現実に対するwarm heartです。だが，それがなぜなのかを解明するためにはcool headが必要なのです。矛盾の解決のためには，ECが出来たように，世界が一つになって，一つの経済が成り立っていくことが理想です。日本も昔は藩政の下諍いが絶えずありました。しかし明治になって，都道府県制がしかれ，諍いはなくなりました。国家がなくならなければこの問題を解決することは難しいでしょう。」

私は，人と人とのつながりの大切さや，自然の恵みである食などを核として，様々な方達と心を通わせていきたく思っている。…この思いが“世界は一つ”の礎の小さな小さな一つとなれるように。そしてその為に，五十路を前に私は今再び学び始めた。今回のお話を，そして歌を心に刻み，自分の目標を見失わないように学んでいこうと思う。

〈追記〉

私のようなものが植樹に参加させて頂けたことも，何か意味のあることと思いました。尾形先生，森田さん，そしてこのような場を与えてくださった黒滝先生。本当にありがとうございました。

いただいたアオギリの種は大事に育てます。春，暖かくなったら蒔いてみようと思います。